岐阜市歴史博物館

博物館だより

No.99　2018．6

提灯絵紙摺込見本　紫陽花

菊池華秋画　勅使河原商店製
昭和３年（1928）
縦46.7cm　横105.6cm
館蔵品

勅使河原商店製の岐阜提灯絵紙摺込見本帳より、大内行灯の絵紙摺込見本８間。下絵は川合玉堂門下で、昭和４年（1929）の第10回帝展で特選を受賞する菊池華秋。秋草図が主流の盆用の提灯に比べると、紫陽花を大輪で描いたり、火袋の天地いっぱいに絵柄を配する斬新なデザインなどから、装飾用や輸出向けのデザインであると考えられます。

当商店の経営者である勅使河原直治郎（1859～1931）は、明治維新後にいったん生産が減少した岐阜提灯の復興・改良・販路拡大に努めた人物で、多くの画家との親交を活かし、岐阜提灯の美術的な価値を高めました。

（特別展「長良川が育む 竹の造形 和紙の彩―岐阜の伝統工芸とわざ」にて展示
【会期　平成30年７月27日（金）～９月９日（日）】）

特別展

粋な古伊万里

江戸好みのうつわデザイン

2018.6.2(土)～7.16(月・祝)

いまからおよそ400年前の1610年代に、肥前国有田（現 佐賀県西松浦郡有田町）で日本で初めてとなる磁器の生産がはじまりました。有田にほど近い伊万里港（現 佐賀県伊万里市）から日本各地へと出荷されたため「伊万里（今利、今里とも）焼」とよばれるようになりました。現在にまで続く伊万里焼ですが、特に江戸時代につくられた伊万里焼をさして、「古伊万里」とよんでいます。

この有田で産声をあげた国産磁器は朝鮮半島の技術を基盤として、意匠（デザイン）は主に中国磁器に倣ったものでした。伊万里焼がはじまって間もないころの作品は、中国磁器に比すれば未熟で素朴な雰囲気をもちながらも、大胆でのびやかなデザインが魅力です。

染付花鳥文大皿　　17世紀中期

中国磁器の代用品として徐々に生産をのばしていった伊万里焼に大きな転機が訪れます。1644年の明清交替による混乱の影響により、中国からの輸出が途絶え、伊万里焼がその代替品として日本国内市場を席巻し、飛躍的に大量に生産されるようになりました。さらに、万治２年（1659）にオランダ東インド会社によるヨーロッパへの輸出が本格的にはじまると、輸出品としても大きく生産をのばすことになりました。中国景徳鎮窯ではじまった芙蓉手や、ヨーロッパの宮廷を飾るのにふさわしい意匠を備えた金襴手は、こうした輸出を意識して発展したデザインです。

色絵金彩群鯉鳳凰花文大皿　　18世紀前期

初期には高価であったため、朝廷や幕府、大名といった上層階級のみに使われた伊万里焼でしたが、17世紀後葉の元禄期には、好景気に沸いた商人たちが手にするようになり、さらに生産の拡大とともに庶民層にも広がりをみせていきました。

本展では、初公開の個人コレクションを通じて、江戸時代の人びとが好んだ古伊万里の魅力に迫ります。

磁器の美－文様百様

伊万里焼の最大の魅力は器に描かれた文様にあります。

磁器の白い肌と呉須(主成分は酸化コバルト)による「染付」の藍色という鮮やかなコントラストは､伊万里焼の代名詞とも言えるでしょう。白磁を画紙に見立てた水墨画のように、染付によって太さや濃淡を活かして巧みに文様を描きます。

染付麒麟花唐草文結文形皿　　18世紀中期

1640年代に中国系の技術を導入してはじまった「色絵」は文様に彩りを与えました。色絵は、染付を施され本焼きした素地に赤・黄・緑などの色絵具で文様を描き、低火度で焼き付ける技法です。

色絵婦人花見文水注　18世紀前期

染付や色絵を用いて描かれた文様は、山水図などの風景、中国の故事に由来する人物、美しく可憐な花卉、愛らしい鳥獣、龍や鳳凰といった想像上の生物、吉祥をあらわす文字や幾何学文などさまざまです。現代のわたしたちにとっても“かっこいい”や“かわいい”、江戸時代の斬新、新鮮、はたまた和みやかなデザインを楽しんで頂けることでしょう。

色絵螺旋文蓋物　　18世紀後期

粋な古伊万里－江戸好みのうつわ

江戸時代、いわゆる太平の世が続くと、都市部を中心に人びとの生活様式も大きく変わっていきました。食もその一つです。さまざまな食材が流通し、料理や献立にも広がりがみられるようになりました。こうした食生活の多様化も伊万里焼の普及を促しました。生産を拡大し低廉な磁器を提供することができた伊万里焼は、庶民の求めに対して多彩な文様を施した器をもって応えたのでした。

食事が冷めないよう碗に蓋をともなった蓋付碗は18世紀前半からみられるようになり、蕎麦つゆを入れる猪口は、蕎麦つゆを入れる器として同じ頃より普及しはじめました。これらはむしろ食生活の変化をもたらしたともいえるでしょう。

染付松竹梅鶴文猪口　　19世紀前期

江戸の庶民は奢侈禁止など生活をめぐる多くの制約のなかで、自らの好みを器に反映させ、ハレの日や日常の食に趣向を凝らしたのです。彼ら彼女らの「いき」を感じることができるのも展覧会の楽しみの一つです。

色絵窓絵花垣根文蓋付碗　　19世紀後期

写真 ©Toyama Takayuki

特別展　長良川が育む

竹の造形 和紙の彩
—岐阜の伝統工芸とわざ

2018.7.27(金)～9.9(日)

岐阜市では和傘、提灯、団扇、のぼり鯉など、竹と和紙からなる伝統工芸品が多くみられ、長良川の清流を背景に染物業も盛んに行われてきました。美濃地方は古くより良質の竹が多く成育し、江戸時代より最上級の障子紙として評判が高かった美濃和紙の産地でもありました。長良川の水運を利用し物資の集散地となっていた岐阜では、こうした美濃の良質な竹材や和紙を使用した伝統工芸品が名産として発達しやすい地理的環境にありました。

これらは日常の用具でもありましたが、近代になると輸出品として美術工芸品的な価値が高められ、海外へ販路が開拓されていきます。明治初期には美濃和紙が横浜や神戸を経由して欧米へ輸出されたほか、岐阜の提灯、和傘、団扇なども、紙加工品を扱う貿易商によって輸出されていきます。またそれらは海外で博覧会へも出品され、多くの賞を得ました。海外へ輸出された岐阜の伝統工芸品は外国人を意識した大胆なデザインが施されたほか、紙ナプキンや窓張絵紙など、伝統的な技術を活かした製品も製造されました。

近年ではこれらの伝統的なモノ作りは文化としても評価され、国の伝統的工芸品や登録有形民俗文化財、県の郷土工芸品などの指定を受け、職人の製作技術についても注目が高まっています。一方で現在はこれらの伝統的な製品の生活用具としての需要は限られたものとなり、職人数の減少や製作技術衰退の危機に瀕しています。

本展では長良川が育んだ岐阜の伝統工芸品について、職人の手仕事の道具や、近現代の海外との関わりに関する歴史資料を、多彩なデザインが施された製品の数々とともにご紹介します。

勅使河原商店英文カード　昭和初期
勅使河原商店は紙製品をはじめ七宝・陶磁器・傘など、各種日本製品を扱う貿易商でもあり、神戸・横浜に出張所を設置していました。

窓張絵紙　明治25年（1892）頃
窓ガラスに目隠しや装飾として張り付けるもので、岐阜提灯絵紙の摺込の技術を生かした製品です。

紙ナプキン　大正時代　勅使河原商店製

加藤栄三・東一記念美術館

加藤栄三・東一
風景との出逢い

2018.4.24(火)～7.29(日)

風景は平面表現を主とする作家なら誰もが一度は手がけたことのある題材ですが、作家が目の前の風景を絵にしたいと思う瞬間は、見慣れた景色がいつもとは違う美しさや力強さを露わにした瞬間です。そのとき画家は、スケッチ道具を手にし、自然との対話を始めます。

栄三・東一も多くの風景画を描きました。栄三は取材に出かける旅について次のように語っています。

「旅というのは決して楽しいばかりでなく、旅は忍耐の連続であり、妙な言い方ですけれども、私たちにはある意味においては、ひとつの業であるかもしれません。あるいは修業の場だと心得ています。そうは申しましても、あの山を越え、さらにその次の山を越えて、時々素晴らしい峠の景観に接するときに、ああ、こういう素晴らしい風景を皆に見てもらいたい、あるいは見せてあげたい、とその時、私はもう無性に嬉しくて、自分のスケッチブックに、私の手は果てしなく、時間もかまわずに動きだすのでございます。」

「雨後」加藤栄三

長野県湯田中の神林温泉から少し奥に入った渓流を描いた「雨後」（屏風）は、まさしく栄三のこの言葉を象徴する作品だと思います。

人間の根源を見つめ深遠な画境を築いた加藤東一の記念すべき日展初入選作と特選を受賞した作品は風景画でした。

東一は伊豆の達磨山を取材した「草原」を描いた折に、激しく草むらを揺らす風から自然の生命を感じる一連の風景作品を生み出すヒントを見出しました。

「草原」は昭和27年第８回日展で特選の栄誉に輝きます。その後、「山すそ」（昭和28年）、「崖」（昭和29年）、そして、昭和30年第11回日展において２度目の特選を受賞した「砂丘」と次々と風景の傑作を生み出しました。

「砂丘」加藤東一

東一は「砂丘」について次のように語っています。

「何一つ他のものを持たない中で砂丘は絶えず変化し生きています。その砂丘の生命の悲しさを色と形だけで表現したかったんです。」

砂丘の彼方にわずかに見える海と絶え間なく動く雲と鳥取の大砂丘。単純な構成ではありますが、故に深く見る者の心に入り込んできます。

本展覧会では栄三・東一の風景の名作とライフワークのように描いてきた現地で取材した岐阜の風景スケッチと併せて展示します。

二人が見詰めた自然の生命力を感じとってください。

加藤栄三・東一記念美術館

加藤栄三・東一
鵜飼に魅せられて

2018.7.31(火)～9.30(日)

当館に来館される方々から「鵜飼を描いた作品はいつ展示されますか」という質問がよくあります。様々な題材を描いてきた栄三・東一ですが、中でも鵜飼をモチーフにした作品は人気が高いようです。

栄三は、50歳になった1956年、第12回日展に「篝火」を出品しています。この年以降、長良川の鵜飼を本格的に取材し、日展出品作をはじめ数多くの作品を描きました。

栄三は川合玉堂宅を訪ねた際「長良川で育った自分もいつか鵜飼を描きたいのですが」と話したところ、玉堂は「まず鵜から写生し鵜をしっかり頭の中に入れなさい。それで鵜は鵜、川の流れは流れ、鵜匠は鵜匠で絶えず写生していれば、いつか描けるようになりますよ」と教えていただいたという。

その言葉通り、栄三はたびたび帰郷しては鵜飼を描くための取材を続けていました。群青を主とした色彩の金華山に黄金色の篝火を配した構図は、栄三独特の鵜飼の解釈であり、見る人々の心に深い感銘を与える名作となりました。

加藤栄三「篝映」

東一も「鵜飼は兄栄三も沢山描いていますが、私は、私なりに子供の頃から間近に見てきたことと、玉堂・青邨両先生、そして兄貴らが鵜飼に取り組んでいますから、私も鵜飼というものを何かの形で継承したいな、といった気持ちで鵜飼を描いてきました。」と先人が描いてきた鵜飼の取材を引き継ぎました。

東一は、鵜飼を描き始めた当初、兄：栄三が描いた鵜飼と似ることを嫌って、意図的に篝火を赤く描いていましたが「やはり篝火はあの色だよなぁ」と、晩年は兄：栄三が辿り着いた黄金色の篝火に変わっていきました。

兄弟で同じ鵜飼を描いても、栄三作品からはノスタルジーの念を感じるとることが出来、東一作品からは力強さと幽玄さを感じます。芭蕉の句「おもしろうて　やがて悲しき　鵜舟かな」といった豪華絢爛とした後に、篝火が消え、さみしさと華やかさの余韻が残る作風は二人に共通しています。

加藤東一「篝火」

本展では本画（完成作品）とともに二人が描いた多くの素描（スケッチ）の中から表装の終わった鵜飼にまつわるスケッチやドローイングも展示します。

二人が取材した素描と素描を基に描いた本画を比較しながら鑑賞していただき、鵜飼という題材の魅力を二人の作品をとおして再認識していただければと思います。

平成 29 年度受贈資料

平成29年度は、表記の皆様に貴重な資料をご寄贈賜りました。
厚くお礼申し上げます。（50音順、敬称略）

芳　名	受　贈　資　料	
青木　美都子	洗たくだらい	1点
安達　公子	種痘済証 軍票 米穀通帳	2点 2点 1点
荒深　好映	糸車 綿くり器 電気アイロン 電気式物干竿 電気鍋	1点 1点 1点 1点 1点
神山　佐敏	体験用食器類	一式
加藤　賀津美	『市民グラフ』岐阜市市長室広報課･編集 No.6（1968年）～14,17～18（1971年） 大正５年　岐阜市兵事会盃	11冊 1点
川出　浩誉	レーダー作戦ゲーム Cavemen game ダイアモンドゲーム 力士消しゴム	2点 1点 1点 一式
小林　明美	レコード盤	一式
小林　淳子	バネばかり	一式
白木　善久	白木かなゑ資料	一括 （70件）
杉山　惣七郎	火事装束（刺し子半纏、頭巾）	1件
永縄　美恵子	奴傘（「ビニール入丈夫」）	1本
長屋　良隆	掃除機	1点

芳　名	受　贈　資　料	
花村　正勝	今町２丁目　祭礼用具	一式
濱渕　英紀	電気スイッチ 電気プラグ アダプター 電球ソケット	3点 3点 6点 3点
廣江　一起	凧	3点
藤井　清	金属供出証書 大正期教科書	6点 1点
船戸　栄美子	青木家資料	一括
松野　寿	松野家文書	一括 （64件）
箕浦　友則	木蘇岐山書	1点
武藤　正光	荷車標識（三輪村）	1点
長谷　美恵	昭和初期の花嫁衣裳	1式
長良小学校	給食用食器 校長机 明治期教科書	12点 1点 一式
山内　裕美子	昭和42年度1年生教科書･ノート･ドリル 昭和40年代ほんよみカード 昭和40年代作文	22冊 1枚 4点
山本　峯子	足踏みミシン用のイス	1点
吉田　純子	ホウキ	1点

■分館　加藤栄三・東一記念美術館の展示■

本誌５ページで紹介した以外の分館展覧会は以下の通りです。

４月24日（火）～６月10日（日）　―透明感ある作風―　青木　年広　展
６月12日（火）～７月29日（日）　多賀 雪庭　日本画展
７月31日（火）～９月30日（日）　石川　響　　日本画展

■特集展示（２階　総合展示内）■

２階の総合展示の一角に特集展示室を設置し、１～２ヵ月ごとにテーマを設けて資料を公開しています。これからの日程は次のとおりです。

５月25日（金）～７月16日（月）　　コレクターの視線　―私のイッピン―
７月21日（土）～９月９日（日）　　濃尾震災とその時代

■分室　原三溪記念室の展示■

～７月６日（金）　　三溪と出版
７月７日（土）～８月17日（金）　　歴博コレクション

上記の日程は、都合により変更する場合もございます。ご了承ください。

館蔵資料紹介

①二行書「帰省途上吟」原三溪書
②二行書「登比叡山」原三溪書

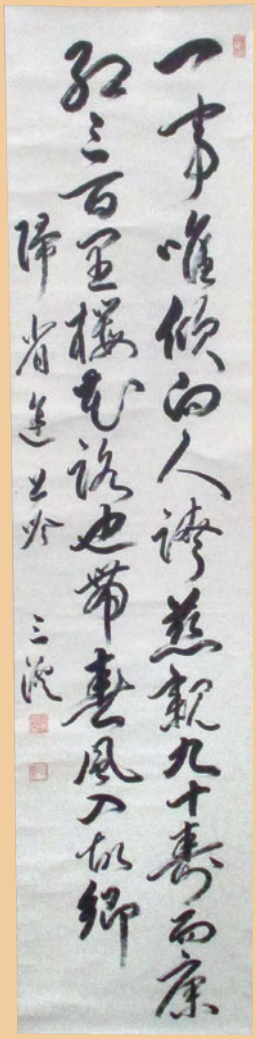
紙本墨書
時代：①昭和10年４月　②大正～昭和初期
寸法（紙面）：①129.7×30.2（cm）　②132.5×30.6（cm）

作者である原三溪（本名:富太郎、1868～1939）は、厚見郡佐波村（現・岐阜市柳津町）の出身です。三溪は、生糸貿易で富を築いた経済人であると同時に、古美術の収集・保存公開、同時代の芸術家の支援など、多様な業績を残した人物でもあります。

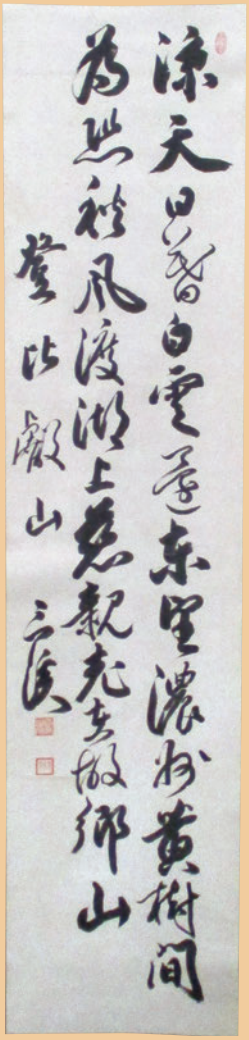
①「帰省途上吟」は、故郷佐波村への帰途、年老いた母親への思いを題材としており、この漢詩は三溪の和歌･漢詩をまとめた『三溪集』にも掲載されています。また、三溪の作品写真集である『三溪画集』第五巻（1937年出版）に「原家所蔵」と記載があり、三溪が晩年まで手元に残した作品であったことが分かります。

②「登比叡山」は、比叡山から故郷（「濃州」）を望み、親（「慈親」）に思いを寄せる内容です。この漢詩も『三溪集』に掲載されています。

どちらも三溪自詠・自筆の作品であり、明治18年（1885）に故郷を離れて上京し、その後は主に横浜で活躍した三溪が、実業家として成功した後も絶やさなかった、実家との交流や故郷岐阜とのかかわりを知るうえで重要な資料といえるでしょう。



①「帰省途上吟」



②「登比叡山」

＊＊

利用の御案内

■ **開館時間**　午前９時～午後５時
（入館は午後４時30分まで）

■ **休 館 日**　毎週月曜日と祝日の翌日、年末年始（12月28日～１月３日）
（月曜日が祝日の場合はその翌日）

※特別展・企画展開催中は変更することがありますので、ご注意ください。

■ **観 覧 料**（団体は20人以上）

歴史博物館総合展示、加藤栄三・東一記念美術館
高校生以上　300円（団体240円）
小中学生　150円（団体90円）

両館共通で観覧される場合
高校生以上　510円（団体410円）
小中学生　250円（団体150円）

◎下記の方は無料でご観覧いただけますので、①②の方は証明できるものをご提示ください。
①岐阜市在住の70歳以上の人
②身体障害者手帳、精神障害者保健福祉手帳、療育手帳の交付を受けている人、およびその介護の方１人
③岐阜市内の小中学生
④家庭の日（毎月第３日曜日）に入館する中学生以下の人と同伴する家族（高校生以上）の方

企画展は、総合展示料金でご覧いただけます。
特別展は、その都度料金を定めます。

■ **交通案内**　JR 岐阜駅・名鉄岐阜駅から岐阜バスにて長良方面行きに乗り、「岐阜公園歴史博物館前」で下車、すぐ東に歴史博物館があります。
岐阜公園内ロープウェー乗り場すぐ隣に加藤栄三・東一記念美術館があります。

博物館だより　№99　2018.　6
編集・発行　**岐阜市歴史博物館**
〒500-8003 岐阜市大宮町2-18-1　☎058(265)0010
（分館）**加藤栄三・東一記念美術館**
〒500-8003 岐阜市大宮町1-46　☎058(264)6410